

B地区・中世墓地の問題 B地区では、火葬場の周辺で中世墓地の有無を検討したが、墓地の存在を裏づけるような遺構や構物はまったく検出されなかった。火葬場に近接してトレンチは設けなかったが、周囲のトレンチの状況から考えて、現在の墓地に残る中世（室町時代）の石塔類は、おそらく江戸時代以降墓地の形式に伴って付近から寄せ集めてきたものであろう。もし仮に、中世に墓地が営まれていたとしても、現在の墓地と重複した、きわめて範囲の限定されたものであっただろう。

延勝寺湖岸の石垣 A地区より続く湖岸の石垣は、C地区の調査地点が南限である。C地区で調査した石垣については、その形状をよく観察すると、北面と西面は比較的大きな石を用いて、石の面を整えて築いているが、南面は雑に石を積上げただけで特に整えられていない。石垣がよく整備されている北面は水路、西面は琵琶湖に面している。

湖岸に築かれた石垣は、各々同じような規模と構造で、湖側を意識している。これは、瀬田川の南郷洗堰改修（明治38年）以前、増水があると湖水面が上昇し、しばしば内陸部まで侵水の被害をうけていた。そのため、特にこの地域では、湖岸に石垣を築いて侵水を防いだり、あるいは舟道を確保したのである。

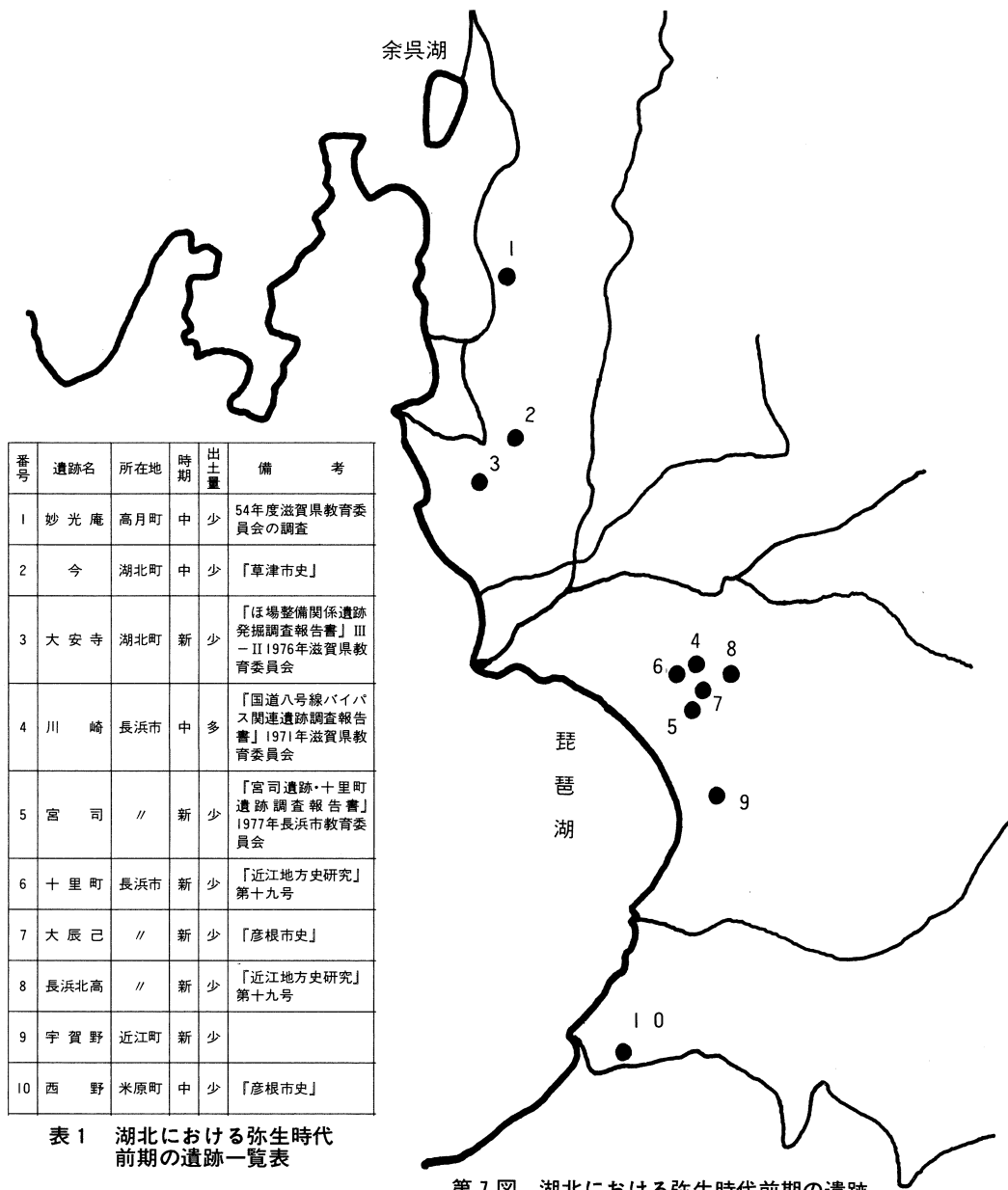
C地区調査地の北面石垣に沿って東西に流れる水路は、湖から延勝寺の村の西端まで続き、以前は村の中に舟着き場が設けられていた。この水との闘いに石垣が築かれた時期は比較的新しく、古老の談によれば明治の中頃に、対岸の葛籠尾崎より石を舟で運んで築いたといわれている。

（2） 湖北における弥生時代前期の遺跡分布

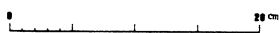
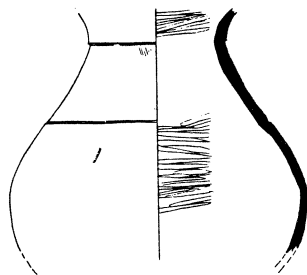
遺跡の分布 県下の弥生時代前期の遺跡は、これまで湖南を中心に分布が知られていた。ことに近年の開発に伴う発掘調査が増えるにつれ、遺跡および資料の増加は著しい。このような中であって、湖北では長浜平野に所在する川崎遺跡や大辰巳遺跡が著名であったが、それ以外の前期の遺跡はほとんど知られていなかった。ところが最近になって、今回の調査で発見されたように、少量ではあるが湖北各地で第Ⅰ様式の土器が確認されるようになってきた。現在までに判明した遺跡は別表に示すとおりである。

主な前期弥生式土器

（1） 長浜市川崎遺跡



第 7 図 湖北における弥生時代前期の遺跡



第 8 図 川崎遺跡出土弥生式土器

川崎遺跡では第一次の調査で多数の弥生時代前期第Ⅰ様式の中段階に比定される土器が出土された。又、この時に中段階の土器と供伴して東海系の五貫森式土器や檜王式などの縄文晩期の土器も出土している。川崎遺跡はその後、長浜市教育委員会によって数次の調査が行われた。その結果宮成良佐によると調査が行われた。その結果宮成良佐によると第8図の1、2の土器を前期第Ⅰ様式古段階に比定し、遺跡自体の時期も古段階にまで下げた。

(2) 高月町妙光庵遺跡

妙光庵遺跡からは少条のへら描き沈線を持つ甕などが遺構より出土している。この遺構は南北方向に2.5m×東西方向に1.5mの楕円形の土拵である。出土土器から前期第Ⅰ様式中段階に比定される。また、湖北では、唯一遺構に伴う出土であり、貴重な資料となっている。

(3) 米原町西野遺跡

入江内湖の扨拓事業によって出現した遺跡である。地元の彦崎文五郎氏によって、縄文時代以降の遺物が多数確認され、『彦根市史』に報告された。ここでは、少条のへら描き沈線をもつ土器や多条のへら描き沈線をもつ土器など弥生時代前期第Ⅰ様式の中段階から新段階にかけての遺物が表面採集されている。

(4) 長浜市十里町遺跡

十里町遺跡では第一次調査で新段階のへら描き沈線をもつ壺が出土している。第二次調査では三条のへら描き沈線をもつ土器や削り出し突帯をもつ土器片の出土が報じられている。

(5) 長浜市宮司遺跡

宮司遺跡では新段階の多条のへら描き沈線をもつ土器が出土している。又、ここでは、東海系の縄文晩期の土器も共伴して出土している。

(6) 湖北町大安寺遺跡

大安寺遺跡では、ほ場整備による事前発掘調査の際に、新段階と思われる多条のへら描き沈線をもつ甕が表面採集されている。

(7) 長浜市長浜北高遺跡

長浜北高遺跡では新段階と思われる多条のへら描き沈線をもつ土器が、少量ではあるが出土している。

まとめ 上述した遺跡の時間的な関係は、まず古段階の土器の出土が報告されている川崎遺跡が弥生時代の初現として位置づけられよう。古段階とした土器については、口縁部の破片のみであり、この土器の全体像については必ずしも明確ではない。また、出土土器が2片しかないことなどから川崎遺跡を古段階の時期まで下げる事については疑問が残る。しかし、供伴して出土した縄文晩期の土器や、中段階の特徴をもつ土器の中にも古い西素をもつ削り出し突帯の土器が存在することなどから、やはり湖北では弥生時代前期の遺跡としては最初の遺跡であろう。川崎遺跡の次に位置づけられるのは妙光庵遺跡である。妙光庵遺跡では削り出し突帯をもつ土器の存在も確認されている。そして同じ様な時期に西野遺跡も出現したのであろう。

新段階になると長浜平野の後背湿地を中心にして遺跡が広がる。なかでも弥生時代中期に最大規模になる大辰巳遺跡などは前期新段階で早く遺物がまとまって出土している。また、川崎遺跡などは引き続いて遺物の出土が見られ、その周辺部である宮司、十里川遺跡などが出土してくる。長浜平野以外にも新段階になると遺跡が多少増加してくる。

以上のように遺跡を概観すると、弥生時代前期第Ⅰ様式の中心は、長浜平野の後背湿地に生活していた人々に求めることができよう。当時の地形的な考察は、これまでになされた事がなく十分な判断をすることができないが、湖北の湖岸には内湖が多く、浜堤状の地形に生活基盤を求めて居住するには不都合が多かったと考えられ、長浜平野以外の遺跡は、妙光庵遺跡を除けば、いずれも少規模なものばかりである。そして、中期以降に何らかの生活改善策が考えられたか、地形の変動によって空間が広がったかして、長浜平野以外の地域にも大規模な遺跡が出現してくると思われる。

なお、長浜平野にある弥生時代前期の遺跡のなかで、川崎、宮司、十里町遺跡では、前期第Ⅰ様式の土器と供伴して、東海系の桎王式、五貫森式といった縄文晩期の土器が出土している。このことは弥生時代前期においても、湖北における土器様相は東海地方と交錯した状況にあったと考えられる。